

令和4年度 モアショロ原野螺湾足寄停車場線
モアショロ原野地区の環境影響に関するワークショップ（第1回）

【 議 事 概 要 】

日時：令和4年12月1日（木）14：00～16：15

場所：とから館 2階 孔雀の間

出席者：

《ワークショップ参加団体》

団体名	氏名	備考
帯広ウチダザリガニ・バスターズ	鏡 坦	
川と河畔林を考える会	高倉 裕一	
雌阿寒自然塾	岩原 榮	
十勝自然保護協会	川内 和博	
NPO 法人 十勝多自然ネット	坂入 隆	

《有識者構成員》（欠席：柳川 久）

氏名	専門分野	所属等
加賀屋 誠一（座長）	自然災害科学、都市工学	北海道大学 名誉教授
山本 純郎	鳥類（シマフクロウ）	環境省シマフクロウ保護増殖委員
持田 誠	植物	浦幌町立博物館 学芸員
澤村 寛	地質	足寄町動物化石博物館 特任学芸員
石垣 章	淡水魚類	十勝の生態系再生実行委員会 委員

《オブザーバー》

氏名	所属等
日比野 晃裕	環境省 阿寒摩周国立公園阿寒湖管理官事務所 管理官
小野寺 信成	北海道森林管理局 十勝東部森林管理署 統括事務管理官
佐藤 美波	北海道森林管理局 十勝東部森林管理署 技官
林 俊英	足寄町役場 経済課商工観光振興室 室長
岩淵 堅志	足寄町役場 建設課建設室 室長

《帯広建設管理部》

氏名	所属等
寺越 孝則	十勝総合振興局帯広建設管理部 事業室長
高橋 崇史	十勝総合振興局帯広建設管理部 事業地域調整課 地域調整課長
谷 伸二	十勝総合振興局帯広建設管理部 足寄出張所 所長
猪又 博高	十勝総合振興局帯広建設管理部 事業室道路課 道路課長
高井 幸樹	十勝総合振興局帯広建設管理部 事業室道路課 主査（道路）
小島 隆宏	十勝総合振興局帯広建設管理部 事業室道路課 主査（舗装）
松本 俊春	十勝総合振興局帯広建設管理部 事業室道路課 主幹
深澤 亮雄	十勝総合振興局帯広建設管理部 事業室道路課 主査（道路第四）
大村 佑太	十勝総合振興局帯広建設管理部 事業室事業課 技師

ワークショップ意見交換会

【外来種駆除】

高倉：資料 P55、56、オオハンゴンソウ駆除。私も三つの方法の中の掘取りで参加しました。他に抜取り、刈取りをされた方もいた。で、その後どうなったかと、先日、現地見学したけれども、掘取りも抜取りも刈取りもほとんど変わりなく、オオハンゴンソウは駆除されていなかったという事実を見せていただいた。今後の駆除方法について現地でも意見交換した。そんなに大きな範囲でない。道路の法面、排水路、限られている所から、私は、これはオオハンゴンソウの根を含めて表土の約 40cm を重機ですっぽり剥ぎ取って、そこに新たな土を入れ替えてはどうかと。それが一番正解な方法ではないかと思いました。

建設管理部：オオハンゴンソウの駆除については先日、掘取り等やりましたが、駆除は難しい所です。確かに法面を全部剥ぎ取るのは一つの考え方だと思います。10月に岡村先生に現地を見ていただいた時に、防草シートにより一面を覆って陽が当たらなくすることで次のステップの駆除としてやってみたらどうかと意見がありました。これについては岩原さんと1月予定の保全会議の中で提案し、その内容についてお話をさせていただき、来年度の課題として考えていこうと思っております。

座長：オニアザミ等の処理の仕方について指摘いただきましたので、それについて何かご説明がありますか。

建設管理部：オニアザミについては、今試験をしている民地については全て除去して処分することを考えています。これから先、オニアザミ、裸地になるところは分かっているので、道路を作っていく上ではなるべく裸地部を残しておかないという事を考え、皆さんの意見を取り入れ侵入をさせないような対策を考えていきたいと思えます。

持田：先程いろいろ説明のあった通りですが、P21～P23にかけて見ていただくと、この環境で空き地を作るとどうなるかということが立証されている結果だと思う。以前からお話していることなので想定通りの結果であるということ。大事なことはこういった環境を道路を使って繋いでしまうということ。国立公園の中と外をこういった植生で繋いでしまうことをいかに防ぐかということでずっと調査していただいて考えている。それによってどう選択していかなければならないか改めて感じるところです。一つ覚えておいていただきたいのは、アメリカオニアザミそのものは二年草ですので、それ程、残存性があるものではない。個体レベルで見た場合には1回結実性で一回花が付くと枯れてしまう。2年で枯れてしまう。徐々に、ここに3千個体以上あるが、このまま植生が遷移していくとだんだんアメリカオニアザミの方は減衰していく。他の植物に置き換わっていくだろうと思う。置き換わっていくだろうとは思いますが、この区域から完全になくなることはないので、今、生えてる所からずれたところに移動するだけですから、この区域から完全になくなることはない。むしろ、つ

けたタネをいろいろな形で国立公園の中を含めてこれからたくさん押し出していくという事になる。個体レベルで見ると残存はしないのだが、群としてみた場合にこういう状態をなるべく早く減らしていくような形で目標植生を定めて今後の植生方向を検討していくとことが大事だと思います。この現地試験をやっていた場所の植生を見ると、報告の中にも書かれています、すでにハンゴンソウやトモエソウといったものがアメリカオニアザミに随伴して沢山生えている。これはエゾシカが食べない植物で、彼らは多年草ですので、恐らく今後アメリカオニアザミが衰退して、彼らとの競争によりだんだん減少していくと、こうしたトモエソウやハンゴンソウが、さらにはここには出てこないトリカブト類がここは非常に多かったような印象があるので、そういった多年草群落に代わっていくのだろうと。それはすでに、この現道周辺の草地などを見てもそういった在来植生が繁茂しているので、そういった方向にだんだん衰退していくのだろうなどはと思いますが。ここで一つ懸念なのは多年草に置き換わる時に、先程、駆除作業の報告があったオオハンゴンソウのような現段階ではまだ侵入していない多年草の外来種が入ってきてしまう恐れがある。これは時間差で出てくる。切り拓いたばかりの時にはアメリカオニアザミのような1年草2年草のような先駆的外来種が出て非常に目立っている。これはやがて衰退していくと思いますが、時間を経て、多年草の外来種が入ってきてここをまた植生として変化させていくことが非常に懸念なので、そういったことを抑制するためにも工法の検討は非常に重要だと考えています。

【防 災】

高倉：この間雌阿寒岳の噴火を想定して避難道路をどう作るかという事で、7・8年、現地を見ながら、ずっとこの協議に参加してきました。元々は御嶽山の噴火に伴い、登山者の大きな命が失われたことを二度と全国の活火山を抱える地域で繰り返さない様に、という事で避難道路を作ってはどうかと協議してきている訳ですが、前段のところ足寄町の方が説明した通り、私は先日、オンネトーの湖畔に作られた新たな休憩舎、お休みどころを見て、認識を共有しなければいけないかと思って。あのやり方はどういう機能、シェルター機能を備えて作られたのかとことを前回質問し、今日、お答えいただいた。発電機機能以外にシェルター機能が一切ないという事ですね。避難道路を作っている協議をしている同時期に作られたあの休憩舎は、どういう姿勢で、どういう思いで作られたのかという事に非常に疑問を持ちます。火山岩が雌阿寒岳の火口から1,000m上空に飛んで、降り落ちてきた時にあの館は完全に火山岩が突き抜けるしかない。登山者、利用者の命を守るものが何もない、そういう機能の建物を今この時期になぜ作らなければならないのか。アウトドアショップと軽食の機能を持った、まさに観光目的というか。今、要請されている危機感というか、時代の要請に全く答えていないそういうものではないかと思う。ヘルメット、水、食料の備蓄はないわけです

よね。その他にも 24 時間、あそこに避難できるかと言えば全くあそこに避難できる機能もないと。そういう足寄町や、休憩舎に補助金を出した国と道との関係者は何をどう考えているのかと非常に疑問に思います。十勝岳の望岳台にシェルター機能を持ったシェルターがきちんと作られている。24 時間、誰でも避難できる強固なシェルター。比較して、何が問題なのかという事を是非、足寄町を含めて関係者で考えるべきだと。主たる本日の議題ではないので、問題提起です。

足寄町：足寄町です。ご意見ありがとうございます。発言の中で発電機等という言い方をしていましたが、発電機だけではなく、おそらくヘルメットとか防災用備蓄用の食事できるものも入っているかと思えます。全て詳しく把握している訳ではございませんので、そこはきちんと確認してご説明をしなければいけないと思えます。で、発電機等と言いましたが、発電機のみではございません。そこはご理解いただきたいと思えます。

川内：オンネトーの休憩舎について、6 月のオープンの時休憩させていただきました。いろんな機能を持つと言うことでしたが、結構ガラス張りであるという事と、トイレが男女にそれぞれ 1 つしかないという点が気になりました。

建設管理部：足寄町の件については確認して、改めて次回WSまでに精査していきますのでよろしくをお願いします。

座長：やはり避難にある程度耐えられるようなものを用意しておくという事は良いのではないかと思います。植生についてはこれからいろいろ出てくると思えますので、その際考えていきたいと思えます。

川内：噴火レベルが 2 に上がった時、火山防災計画を見ますと、登山者に対するものはあったとしても、車はどうなっているのか、書いてあるのかもかもしれませんがよく分かりません。また、この会議の趣旨ではないと思えますが、大型バスは入れるべきでないと思えます。1 台入って来るだけで湖畔道路は大変です。以前、車両調査で台数を出していただきましたが、紅葉の時期 10 月が一番多く、それでも 1 日 10 台いかなかったということがあります。マイクバス程度に制限するべきかと思えます。足寄町の判断ではないのかもしれませんが、そもそもあそこは、車両の規制をしっかりとすれば、避難道路についても、もっといろいろなことが考えられるのではないかと思います。

【蘚苔類】

川内：お願いした資料として出していただいた蘚苔類リストについてです。これはいつのワークショップで提示されていきましたか、このスタイルでしたか。

ズコーシャ：調査は弊社で行っています。平成 29 年度の第 2 回ワークショップで提示させていただいて、ヒカリゴケの生息位置とか風穴周辺の調査、どのような特別な種がいるかなどを説明させていただいています。

川内：その時の提示では 95 種もなかったですよ。

ズコーシャ：その時は掻い摘んで結果を提示しています。

川内：今年気になって歩いてみたりしましたが、その時この蘚苔類が少なくとも第2種（国立公園）の辺りでは膨大にあるのが改めてわかりました。（平成29年度）第1回ワークショップの現地視察で私も入りましたが、すごくいい景観だと思って、今年改めて入ってみたら、大変多くの種類がありました。

結論として、もう少しコケについての林床植生についてはもっと調べてほしいということです。

ここでは5か所位出ていますが実際の道路行程の中でも第2種のいくつかではいろんなものがある。特に気になったのが、54番のホソバミズゴケ。ミズゴケは水分の多い湿った、しかも高山性、亜高山帯以上に分布すると書いてあるように。まさにあそこのアカエゾマツ林を特徴づける、一面に広がっている。実際歩いて、至る所にホソバミズゴケがある。ミズゴケはこの1種しか書いてありませんが、もう1種確認しております、ここに書いてはありませんが。

ヒカリゴケが盛んに言われるけれど、もちろんヒカリゴケはあるのだけれど同時に全体にこのホソバミズゴケが広がっている。資料1, 2 ページに地図が出ていますが、このNo3とかNo2とか第2種の所ですけど、盛土切土で被害が広がるという点をもう一度注意深く見ていく方が良いと思います。ヒカリゴケは阿寒摩周国立公園の指定植物になっています。ミズゴケのほうもミズゴケ属という形で指定植物に書かれていますがホソバミズゴケも入っていると思います。この辺りももう一回注意深く丁寧にやっていただきたいと思います。我々は現道を主体にしたものを作っていたきたいと前から言っていますが、この第2種の部分だけでも、わざわざこの辺りを開いている。現道に並行する形にはなっていますが、わざわざなぜこういう形にしなきゃいけないのか、もっともっと被害を最小限に食い止められるのではないかと、ということ発言しておきます。

建設管理部：蘚苔類に関する事計画道路に関する事、改めて確認させてもらって、次回のワークショップで回答させていただきたいと思います。

鏡：先程、川内さんからお話が出ていた蘚苔類について。森林の中の特に大径木を伐採すると、微気候というか小さいローカルな気候が変わっていく。太陽光の当たり方とか風の通り道がわずかでも変わり、それによって水分状況が変わっていく。そのことで一番分かりやすい例としてフユシャクガが影響を受けやすいので、フユシャクガの調査をお願いしました。これについては結果も出ていてありがたいと思います。鳥や他の昆虫がいない時期に、つまり冬に、へらへらと飛んで、フェロモンを頼りに交尾をするデリケートな昆虫です。水分状況が変わり風の通り道が変わることで、もろに影響を受ける生物はまだあります。蘚苔類です。今日、改めて詳しいリストを頂きましたが、この中に貴重なものがあるのではないかと。別な機会で結構ですから、もちろん外部には公表できませんが、こういう状況もみんなでも共有していた方がいいのではないかと思います。

座長：ありがとうございます。コケ類の調査結果が明らかになったことはプラスになることだし、どう対応すべきかという所が重要になるのかなと思います。

持田：川内さんから指摘のあったコケですが、北海道は環境アセスメントで、まだ蘚苔類の調査というのがほとんどされた実績がない。今回はいろいろお願いもして、地衣類や蘚苔類

の調査もやっていただいた。道路アセスで蘚苔類の調査もやったというだけでも今回の意味は大きいかと思う。実際にこれをどう活用していくかという段階には、まだなかなかないのはこの間見ていて実感しているところです。一つだけ私見を述べさせてもらうと、95種類の蘚苔類、実は、種類が多いように見えるが、重要種はそれほど多くない。ミズゴケの中でも先ほど出てきた、ホソバミズゴケというのは一般にみられる最も広範な植生に見られるミズゴケで、本当に高度に発達した湿原や特別に見られるようなミズゴケの種類ではない。蘚苔類の専門家と現地でお話したが、当地域の風穴周辺のコケ植生は非常に乾燥化が進んでいて、ちょっと想定していた種がでないという話をしていた。中には北海道で初めて記録された種類であるとか、色んな知見がここから出てきていますが、残念ながら種類としては重要度が高いと指定されている種類は含まれていないと見ています。ただ、これだけの蘚苔類マットが、アカエゾマツなどの針葉樹林帯に敷き詰められている植生景観というのは非常に希少で、北海道では非常に少なくなっている景観だというのは間違いないと思う。やはり、日本の環境アセスメント制度の指定種主義という弊害が今回、非常に出ている。在来種植生もそうで、やはり針葉樹林帯がこれだけ面積的に残っている区域ということで考えると、非常に貴重な区域なのだが。こういった環境アセスメント等、検討を行うとやはり種レベルでの貴重種という様なものにどうしても重点が置かれてしまうので、そうするとなかなか植生としては保全対象にはならない。今回、そういったことが明確に出ている一つの現れかなと思います。そうは言ってもこういった機会を含めてこれまで調査されていない区域をきちんとデータ化し、記録化していくことは重要だと思いますので、今回の蘚苔類調査を含めてこのような調査全体、いろいろな試験を含めて非常に意味のあるものをしていただいていると思っています。これらの結果を踏まえて、外来種の問題を含めて生態系への影響を可能な限り少なくしていく方法を具体的に検討していかなければいけない、そういう責任があると実感している所です。

座長：コケ類について、群落というという視点でみることはその種類がありきたりのものであっても私は重要であると思います。多様性という視点で考えていくことも必要だと感じます。ありがとうございます。

【道路法面植生】

鏡：現地でのWSに参加させていただいて、強く感じたのは道路法面などの植生をどうするかという問題です。侵略的外来種に有効な手立を見つけるために、エゾシカの影響なども考慮して、在来種の試験圃場の様なものを作ったり、いろいろ実験をやっている訳ですけども、決定打がなかなか見つからない。阿寒摩周国立公園への、侵略的外来種の供給源にならないように手を打たなければならない、かなり重い問題があるのだなと気が付きました。

坂入：溶岩区間と非溶岩区間の植生について。溶岩区間はそもそも栄養分のない岩ですよ。それに対して、今考えている工法は継続的に植生できるのかなということも検討しておいた

方が今後役に立つのかなと思いましたので検討をお願いします。

座長：溶岩区間の対応は具体的になにかあれば説明してください。

建設管理部：先程、提案した植生工法は主に非溶岩区間という所です。溶岩区間については先程話した通り繊維ネットという話があります。おっしゃる通り切土部については溶岩層もあり繊維ネット工。ただ、やはり、切土もあれば盛土もあるので、盛土部については溶岩そのままではなくて、品質もあるので土砂系というのも使うことを検討しております。来年度はこの選定した中で、翌年それをどういう所にどういう方法でという検討の中で、今仰っていただいたような、溶岩部はどうか、繊維ネット実際どうするか、植生工もまた別の考え方があってはないかという事を含めた検討を、これからしていきたいと考えています。

持田：工法の検討について、岡村先生からご提言をいただいているものを私も拝見しましたが、私がその中で1点だけ同意しかねるのは、張芝に在来の野芝（ノシバ）を使うという方法。野芝（ノシバ）は北海道にも実際に生えている在来種です。北海道の場合は道南の方に海岸沿いの草原に植生として実際に存在している植物で、道東の沿岸では極めて少ないけれど、全くないとは言いきれない、そのような種類です。在来種ではあるが、恐らく野芝（ノシバ）を張芝として持ってくるという事は、現在、道南の方で生えている自生の野芝（ノシバ）をマットにして持ってきて張り付けるという形をとると思う。そうすると在来種の国内移流という様な事に繋がります。我が国は生物多様性保全条約に批准して、生物多様性国家戦略を定めて、今、北海道も北海道版の生物多様性の地域計画をこれから作成していくのだろーと思っておりますが、生物多様性の議論の中には種類の多様性ととも、遺伝的な多様性も非常に重要視されていて、地域固有の遺伝子に何らかの改変を起こすような国内在来種の移動というのは行うべきではないと考えています。特にこの地域では今、在来種か外来種かで議論のあるクサヨシの導入をすでに視野に入れているわけです。これに加えて、遺伝的攪乱の恐れのある野芝（ノシバ）をどこか他の場所から持ってきて、在来種だというだけでここに導入するというのは、やはり危険性が非常に大きいのではないかなと思います。私個人的には、在来種の野芝（ノシバ）を入れるのであれば、すでに道内で導入実績のある侵略性のない外来種を植生として導入する方がまだ適切ではないかと考えているので、そのあたりを継続的に検討いただければと思っています。

座長：お話は非常によくわかります。例えば野芝（ノシバ）については、現在考えているのは道南地域の芝をこちらに持って来られるかどうかだと思います。それを考えると、そこは慎重に考える必要があるかもしれません。

【ニホンザリガニ】

鏡：ニホンザリガニの調査結果が出ている地図を今日見せていただきました。一つの川にウチダザリガニとニホンザリガニが分布しているのがわかりました。予想はしていましたが、この川は源流がオンネトーになっていて、オンネトーからウチダザリガニが入り込んでいる。あの川に元々生息していたのはニホンザリガニのはずです。ウチダが入る前はニホンザリガ

ニがいた。道内のいくつかの河川で、同じような例はいくつかあります。その場合の多くは、ウチダザリガニが下流の方に、ニホンザリガニが上流の方にいる。ウチダが下流から上流に向かって、川の流れに逆らって生息域を広げてゆくことが多い。しかし、ここの川は逆になっている。ウチダが下流に向かって、易々と生息域を広げて行ける。

道路とは直接関係ない話したが、道路に関して生物調査をやったことで、ニホンザリガニに迫っている危機的な状況が1つ分かった。ちょっと大変だな、気付かった方が良いんだなという状況だという事が一つ分かった。ありがたかったです。

【道路土工】

坂入：資料 P18、P22 を重ねて見ていただくと分かるんですが、P18 に道路の画が出てきますよね。P22 の方を見るとオニアザミの増えているのが分かるが、今後、工事発注になった場合、国立公園内の伐採区域というのは結構シビアに用地内しか伐らないですよ。そうなった場合、オニアザミが増えるとか今回いろいろ分かりましたが、今後、P22 に見る様にこのさらに上る所などまだまだ木が生えている。今の状況と大分違うと思う。そうすると実際工事で盛土をするにしても切土にするにしても、鋤取りが付きものです。先程出たように、鋤取りと考えるのか、鋤取ったものを産廃扱いにするのか、盛土の中に入れて封じ込めてしまうのか、という工法も考えていいのかなという所もあります。

座長：それでは澤村さんのほうから何かありますでしょうか。

澤村：何年かに渡っていろいろなお話を伺ってきました。いろいろな植生とか動物の調査もされて、地域の中で貴重な面白いところを勉強しましたが、今日のお話の中で最後のページ、溶岩区間と非溶岩区間。溶岩区間内については区間内で削ったものを、切土ですかね、切土したやつを盛土に使わないと仰ったんですね。

建設管理部：切ったものは使います。全体的には残土の予定にはなるのですが、一部流用することも考えています。

澤村：一部流用ということは切土で間に合わないことになるという事ですか。

建設管理部：基本的に外からの土は持ち込まないと考えているので、設定した工区内の中で切土をしてそれを盛土に使うということで考えています。

澤村：切土の所は玄武岩溶岩が露出するわけですが。土はないので、侵入を受けることはあまりないだろうと思いますが、盛土した方も溶岩地帯ですよ。溶岩を盛土するとその時に、溶岩の周りにコケや植物が生えていますから、若干土壌化してくるわけで、表面に引っかかってしまうと溶岩ではない成分が表面的に増えるということになって、しかも避難路がすぐ近くでしょうからその辺の問題がでてくるかなという気がした。少し先の話しかもしれないが、具体的にどういうふうに切土が出てくるのか、或いは切土と盛土という所の違いを斜面の方に、法面の方にどういうふうに対策をとるのかをもう少し具体的に示していただけるといいかなと思いました。

座長：最近の建設の一つの考え方として、切土盛土のトータルでプラスマイナスゼロという

ような一つの原則論があり、今回の建設にとって重要な視点になると思う。

【鳥類調査】

座長：まず、山本さん、先程シマフクロウの報告があり、今年から追跡調査をやる予定ですので、そういうものを含めてお話ください。

山本：フクロウ類について少し言わせていただこうと思います。キンメフクロウというのは冬期間コールバックしないと、なかなか応えてくれないので、これを継続していく。また、ボイスレコーダーを設置する場所を、できればもっと中間の辺りに持つてくることができると思います。シマフクロウについて、2箇所鳴き声の確認があった。これは4月では判断することは難しい。これは移動中のものなのか、それとも営巣していて失敗したのか。その判断が非常に難しいです。4月の早い段階であれば、雌が巣の中に入っていますから、それで繁殖しているのが分かるんですけど、4月の中旬以降になると、大体3月の初旬に産卵に入るので、35日くらい孵化し、その後1週間近く抱えています。孵らない時はそのまま出てしまう。雌が抱卵を放棄して1週間くらいはその近辺で鳴いていることが多い。どこかに行って戻ってきて鳴いたりとか、というのがこの他の地域の大体の行動です。もっと精査していかないとだめだと思う。二日連続ということですが鳴かないでしまえばおしまいですから、もう少し期間を長くするとか言う方法を取ってもらえたらと思う。詳しくは調査会社の方と話をしたいと思います。

座長：一つよろしくお願ひします。3月の調査いくべき。に期待したいと思います。それでは飯嶋さんお願ひします。

飯嶋：これまでの調査では、あの地区に生息するであろう鳥類調査もできたであろうし、長い調査の中で貴重種、重要種も出てきた。今後、重要なことは工事に関わる調査ですので、あの地区に普通に棲んでいるであろう種が、今どのような状態にあるのか変化があるのか、もっと大事なものは、工事の後に変化がでてくるのか、そういう事が検証できるデータを今の内から少し準備していくべきじゃないかと考えています。

座長：ありがとうございます。私も道の方と打合せさせていただいておりますが、工事をやる前のベースラインデータ、現在の状態がどうなっているかときちんと把握しておかなければならないと思います。データが整理されていれば、後々いろいろな対策に役立つと考えられます。

【全体を通して】

座長：岩原さんには先程説明いただきましたが、何か全体で感じたこと等あれば如何でしょうか。

岩原：改めて皆さんの意見等伺いながら、今後どのように進めていくかを痛切に感じ進めて

いるのが率直なところですが、また、皆さんの協力で現地活動し、オオハンゴンソウ、アメリカオニアザミをこれまで綿密に調べていただいて、どのような植生が一番いいのかというのは大きな課題だと実感しています。本当に駆除というのはどこまでが良いのかという事を含めて、皆さんとのお話が今後の上でもたいへん大事な事なんだと思います。開発と自然という事と、先程おっしゃった共存という事がどのような位置付けになるのかという事が、まさに問われているのだという感じもしました。人が入るのが悪いのか動物がいるのが悪いのかという問題と、極端に言うところまで行ってしまうのだという事を感じつつも、国立公園内という自然に恵まれた土地の中で、ましてエゾ林、原生林も含めて、海外から多くの観光客が集まる中で、活火山の麓にあるこの地は、どうあるべきなのかという事を痛切に感じます。私も雌阿寒自然塾をオンネットーで長くやらせていただいておりますが、海外観光客の皆さんの前で、自然が好きで百名山がある雌阿寒岳に上って、帰られる。そういう思いの中でいろいろな人が入って来ると、当然、そこにいろいろな課題がでてくるという事を今まさにおっしゃっていると思う。ですから共存という事を大切にしながら今後の開発について勉強させていただければ、そして良い方法が見つけられればと実感しました。また、活火山の退避と被災のことも出されたので、これからの話しも含めて検討を進めていただきたいと思います。

座長：今回の対象地域の現場で直接課題に取り組んでおりますので、出てくると思うのでその解決に頑張ってくださいと思います。それでは、石垣さん、今回は魚類とかあまりなかったですが、全体的になにかご意見いただければと思います。

石垣：私は魚類関係なので今回の話しは勉強させていただくことが多くて。ただ、道路を作るという事は自然に対して相当な負荷がかかるのだなということを改めて実感しています。今後、この会の中で自然に関していろいろ勉強させていただきたいと思っている。今後共よろしくをお願いします。

座長：皆さんに一人ずつご意見を伺いましたが、これだけは是非言っておきたいというところがもしあれば、どなたでも結構ですので如何でしょうか。

川内：いろいろお話を聞いていると、この道路（計画路線）は、コアの部分に一気に入っていくところがある、緩衝的なものが全くなくストレートに入っていくために、様々な問題が引き起こされていると思います。予定線（計画路線）の確認植物目録という資料を頂きました。393種あるということです。一方、阿寒摩周国立公園の指定植物が378種あるそうです。見比べていくと少なくとも72種が重なっている。72種は保全上非常に重要な種であると思います。そういう意味でこの部分は丁寧に考えていかなければならないと思います。植物の面からも勿論ですが、生物多様性の面からもこの部分は重要なんだということで、何度でも立ち止まって見ていくべきだと思います。少なくともこの第2種の所については、現道ということでもう一度考え直す。すぐ傍をわざわざ開削して切土盛土で範囲を広げるといったことをせずにやっていただきたいと思います。

座長：他になにかございませんか？ もしなければ、本WSでご提案されたこと、課題として提示された内容についてはまた次回のWSまで検討をいただければと思います。宜しくをお願いします。